現代児童文学評論史・事始め

藤田 のぼる

1

この稿のタイトルは、「・」は僕が入れたが、編集委員会から提示されたままのものである。個人誌『ドボルザークの髭』によって、「現代児童文学史」にとりかかっている僕にとってはありがたい注文だが、評論の歴史を考えるとなると、読者のためにも、僕自身のためにも、まずは「現代」以前の児童文学評論・研究の歴史の素描が必要だと思われる。ということで、近代における日本の児童文学評論・研究の軌跡を概観してみたい。

一九八七（第一期）・八八（第二期）年だから、すでに三十年が経過しているが、久山社から滑川道夫・監修、冨田博之、上笙一郎の編集で、「復刻叢書　日本の児童文学理論」（全二十巻）が刊行されている。（以下、原本の表題や引用も旧字を新字に、表記は現代仮名遣いに改めている。）この叢書は、明治（一冊のみ）から大正、昭和・戦前（太平洋戦争戦時下を含む）までの主な児童文学理論書を一挙に復刻したものである。僕などは、ほとんどこれによって、この時期の研究・評論書を初めて手にすることになったが、これには別巻『児童文学研究の軌跡』があり、その最初に上笙一郎が「総説　日本の児童文学研究」を書いている。このあたりにまったく疎い僕としては、しばらくこの上論文などの助けを借りて書くことになる。

日本で初めて「児童文学研究者」と呼べる人が誰なのかということになると、これは蘆屋重常（蘆村、一八八六～一九四二）ということで落ち着く。復刻叢書にも、第一期二巻に『教育的応用を主としたる童話の研究』（大正2年）と第二期六巻に『国定教科書に現れたる国民説話の研究』（昭和11年）と、ただ一人二冊が採られているばかりでなく、やはり二十巻に加えられている日本童話協会編『童話史』の中心的執筆者でもある。二十巻の中でもっとも時代